

ディスアビリティを持つ生徒の鍵盤指導

新井芳枝 佐保淳子 檜垣由紀
(音楽療育鍵盤指導研究ネットワーク)

1. 音楽療育鍵盤指導研究ネットワークについて

私たちは、何らかのディスアビリティ（心身の機能上の能力障害）を持つ生徒が音楽を楽しむことを研究するため、1998年にjet（japan electone teacher's circle）音楽療育研究会を創設し、その後にjetから離れ、2009年に音楽療育鍵盤指導研究ネットワークを設立しました。私たちの目的はディスアビリティを持つ生徒が音楽を楽しめるように指導することであり、通常音楽療法の主要な目的である“音楽による心身の変化の探求”とはやや目指す方向性は異なっています。

2. 活動について

私たちはこれらの生徒（現在、多くは知的障害や小児自閉症の方ですが）に対してレッスンをしていますが、レッスンでは可能な限り生徒および保護者の同意のもとレッスン場面をビデオ撮影し、各生徒について年に1回レポートを提出し、その経験を全員で共有し、類似した他の場面で活かせるような形にして保存しています。また、音楽を楽しむ上で、自尊感情は大きな役割を果たすものと考えており、自尊感情を高める目的で2年に一度発表の場（ハートフルコンサート）を設け、「出演する以上は絶対に失敗体験にしない」ことを念頭にそれぞれの音楽指導者が自分の生徒に出演を打診します。ハートフルコンサートに出場することで生徒は、観客からのpositiveな反応を得、自らは達成感を体験し、場合によってはその場でほかの児者と新たな人間関係を作ることが可能となります。これらの経験が自尊感情の強化につながって、ハートフルコンサート後に行動が大きく変わったように見える生徒もいます。

3. 指導事例

今回は、3名の指導者による鍵盤指導事例をご紹介します。ネットワークメンバーである指導者は、月に1度の定例会での情報交換やワークショップから学び、生徒の特徴を注意深く観察し、生徒に合った指導方法を考え、鍵盤指導を行っています。指導の成果や失敗、悩み等は、定例会で議論し、このネットワークの会長である精神科のドクターのアドバイスを受けて、より良い指導ができるようにしています。今回は自閉症、発達障害、弱視の生徒さんへの指導について発表します。

4. 今後の方向性

私たちは、これまでに、レッスンはどの程度の見通しを持って行えるか、ご家族との関係はどうすればよいか、楽曲演奏のレベルのゴールをどの程度に設定すればよいか、視聴覚に異常がある場合どのようにすればレッスンが可能であるか、など、ディスアビリティを持つ生徒が新たに音楽指導を求めて音楽教室に来られた場合の方略を研究してきました。これは、学校教育とは異なり長期に生徒と関わることが可能である音楽教室でこそ可能なことで、実際に、創設当初から20年以上指導を行っている指導者や生徒もいます。多人数の生徒について長期の指導を行い、その経過を把握している団体は多くはないのではないかと考えており、今後もこのような研究を続けるとともに、次世代の指導者に蓄積された知識を引き継いでいくことが私たちに課せられた使命と考えています。この分野の今後の発展に些少でも役立つことができることが私たちの願いです。